博物館に眠る金魚

春乃苑香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
博物館に眠る金魚

【Ｎコード】
Ｎ７８６９Ｅ

【作者名】
春乃苑香

【あらすじ】
景子には毎晩見る夢があった。その夢を見ているうちに、景子は……。ちょっと不思議な金魚のおはなし。夢を見る景子。景子を支える雅志。そして景子の妹、祥子。３人の“大人”がそれぞれ思うこと。人って、どういう時に一緒にいられなくなるんだろう？物語はファンタジー風に進んでいきます。

プロローグ

ある町の片隅に、博物館がありました。
その博物館には、誰でも入れるという訳ではありません。

なにしろ、その町は、誰にでも行けるというような場所にはありませんでしたから。
町が人を選ぶ、とでもいうのでしょうか。
遠くて近い、そんな場所にありました。

博物館は、昔々、大富豪がこの町にやって来た時に建てたものでしたが、
彼は、自分のコレクションを理解しない、町の人々に対して苛立ち、
（彼のコレクションは、他の人々にはガラクタにしか見えなかったのです。）
ついには、博物館を閉鎖して、自分専用の博物館にしてしまいました。

それ以来、博物館は何人かの手に渡り、
その度に、新しいコレクションが増え、
展示の内容も豊かになりました

しかし、その博物館は二度と開放されることはありませんでした。

今、その博物館は、一人の少年の持ち物として、
ひっそりと街角に建っています。

「博物館の少年」と皆に呼ばれている彼は、めったに外へは出ません。
博物館の中で、ひっそりと暮らしているのです。

そんな彼が毎朝すること。
水槽の水を換(か)えてやること。
先代から譲り受けた、展示物のために。

1．景子の夢　～水の中で～

気がつくと、真っ青な水の中にいた。冷たい水が気持ちいい。
上も下も右も左も、水でいっぱいだ。
水の中をゆっくりと流されながら、私はため息をつく。
水の中なのに、呼吸は苦しくない。
最初は水の中にいると分かって、パニックを起こしたっけ。

分かっていた。
これは、いつも見る夢。
私はこれから起こる事を知っていた。
この夢のせいで、朝起きると、とても辛い気持ちになるってことも。
もう夢なんか見たくない。そう思ったこともあった。

それでも夢を見ることはやめられない。
いつしか夢に抵抗することを私は諦めていた。

いったん、夢に身を任せてしまうと、
この夢の始まりの、水の中は清清しく、気持ちよかった。
自分が洗い立てのシーツみたいに、白く、柔らかく、生まれ変われるような気がした。

透明なブルーの中を私は、泳ぎ始めた。
ああ、あともう少しだ……急がないと。
景子の目の前には小さな黒い点が表れる。
それはみるみる、大きくなっていき、人の形をとる。
少女だ。

少女がこちらに向いて、泳いでくる。
私は急いで、その少女に触れようと、手を伸ばす。
呼吸には何の問題もないのに、手を伸ばすのには水の抵抗を感じる。
少女は、今にも私のすぐ横を、すり抜けて泳いでいってしまいそうだ。
一生懸命に手を伸ばして、少女の腕をつかんだ。
少女は振り返って、私の目をまっすぐに見つめ、問いかける。
「私と遊びたいの？」
私は、黙ってうなずく。
「名前は？」
「景子」
「じゃあ、景子ちゃん、一緒に遊ぼう」
少女が微笑む。私も少女に微笑み返す。
ここまでは良い夢だ、ここまでは。
たとえ、少女が私を覚えていなくても。
彼女が微笑んでいるのを見るだけで、私は嬉しい。

2．景子の夢　～別れのとき～（前書き）

夢の中で、少女と楽しく遊ぶ景子。しかし、お別れの時間は近づいて……

2．景子の夢　～別れのとき～

景子（けいこ）と少女は楽しく遊んだ。
それは景子の想像し得る限りの楽しいことだった。
遊園地でメリーゴーランド、コーヒーカップに乗ることから始まり、
山をハイキング、古いお城の中を探検、
ついには、雲の上まで二人で手をつないで飛んで行き、景子の住む
街を眺めた。

再び、地上に舞い降りると、
少女が今度は川へ行こうと提案し、河川敷で野の花を摘み始めた。

「景子ちゃん、これ、あげる」
今日、景子はいつもより耐えていた。
この楽しい時間を壊したくなくて。
それでも、にっこりと差し出された、その花束に景子は、我慢でき
なくなった。
「ななみ！」
景子は少女を抱きしめる。

その途端、少女の表情がみるみる変わる。
笑顔を失い、その代わりに、大人びた表情が少女の顔を支配する。
くりっとした愛らしい目が、少女に抱きついたままの景子の目をし
っかりと捕らえる。
「ママ。」

その言葉が発せられるや否や、二人に四方八方から風が吹き付ける。
ヒューヒュー
ビュービュー

目も開けていられないほどの風圧で、景子はますますしっかりと、少女を抱き寄せる。

ドンっという音と共に、風が止む。
目を開けると、とても現実とは思えない風景が広がっている。
空の青を映(うつ)した、美しい湖の岸にいる。湖の周りは花畑で、その色彩の豊かさは、まさに天上の世界を思わせる。
けれど、景子は風景に見とれることなく、一心に少女を見つめている。

少女が口を開く。
「なな、いくね」
悲しそうな顔で少女が去っていく。
「待って！行かないで！ななみ、行かないで！」
景子は必死にとりすがるが、少女のどこにそんな力があったのか、そんな景子の手をいとも簡単に、少女は振り払ってしまう。
「ママ、ばいばい。」
景子に背を向け、去っていく少女。追いかけようとするが、足が動かない。どうして？ななみ、行かないで！私はここにいるのに！景子の必死の叫びもむなしく、少女は湖へと消えていった。

3．景子の現実　～本当は？～（前書き）

七海との夢から覚めた景子。景子にとっての夢って、現実って、何なのだろう？

3．景子の現実　～本当は？～

ななみ！

自分の声に目が覚める。午前６時。
まあ、ちょっと早いけど、ちょうどいい。起きてしまおう。

朝食の支度を整えていると、雅志（まさし）が二階から降りてきた。
「おはよう」と声をかけると、
「おはよう。今日も早いな。」と返事が返ってくる。
夫は、それこそ、夢の中の七海のように、にっこりと微笑む。

私たちには、七海（ななみ）という娘がいた。
七海を失った後、少しおかしくなってしまった私に、夫は忍耐強く付き合ってくれた。
夢のことも知っている。
七海が死んだ日から、毎日、見続けているのだから。

でも、私が話さない限り、雅志は無理に聞こうとはしない。
雅志は優しいのだ。雅志が傍にいてくれて、よかった。

心ない周りの人は、七海を失ってショック状態の私に、
「若いんだから、まだ子どもはできるわ」と言った。
「七海ちゃんは安らかに逝けて、幸せだったわ」と。

わかっていた。
生まれたときから、七海は長い間、生きられないと。
でも。でも。でも。
後から、後から、言葉が溢れてくる。

「いってらっしゃい」
仕事へ行く雅志を見送ると、途端に空っぽになる。
雅志は優しくって、誠実で、
家族というぬくもりで、私を包み込んでくれる。
ありがとう、雅志。

ちょっと、しんみりした気分になっていると、
インターフォンが鳴る。ピンポーン。
「おはよう。お姉ちゃん、調子どう？」
妹の祥子（しょうこ）だ。
私の精神が不安定なまま、家に一人でおいておくのを心配した雅志の配慮だろう。
祥子は、夫が単身赴任の主婦は暇だから、と言って来てくれる。
私の周りは、気配り人間ばかりだ。
こうやって、祥子の他愛もない話に笑って応じることができるのは、彼らのおかげ。
ありがとう、祥子。

もう本当は、ほとんどいいの。ちょっと眠れないことくらい、どうってことないわ。
普通に生活できるくらいに、回復してるの。
人間、つよいものよ。生きていけるのよ。

ふと、私は金魚鉢を見て、言う。
「もうそろそろ、水を換えないと。」

「またぁ？　なんだか、ななちゃんの金魚熱があなたにうつったみたいよ。」
言ってから、祥子がはっとして、口をつぐむ。

私は笑って、答える。
「いいのよ、そうなんだから。七海が大切にしてたものだから、私も大切にしたいの。」

「そりゃそうだわ。」
祥子がほっとした表情で答える。「じゃあ、私も手伝う。」

4．得体の知れないものへの恐怖

七海（ななみ）は、うっとりと、金魚を眺めていた。ガラスの金魚鉢の中で、その魚はゆったりとヒレを動かしていた。
金魚鉢の前に頬杖をついて座り込んでいる七海の後ろ姿を、祥子と景子は優しく見守っていた。

祥子が口を開く。
「ななちゃんは、本当に金魚がお気に入りなのね」
「最初はどうかと思ったのだけど、七海が水槽の前を離れなくてね。」

七海は突然、二人を振り返る。
「なな、キラキラ」
七海は年齢の割りに、まだ上手くしゃべれない。
「どうしたの？ななみちゃん？」

七海は、金魚を指差して、言う。
「あのね、なな、キラキラなの。キラキラ。なな。」
興奮してくると、余計に何を言っているのか、分からない。

「金魚がキラキラしてるって、言いたいんでしょう」
「あの金魚も『なな』っていうの？　ななちゃんと同じ名前だなんて、よっぽどお気に入りね。」

「ちがうよぉ。1，2，3，4，5，6，7じゃない、キラキラが。」
「何のことかしらね。」
いきなり、七海がはっきりとした口調でしゃべったので、祥子は驚

いた。
祥子は七海が時々、こわくなる。なんだか、全てを見透かされていそうで。
この優しい姉と義兄の娘がこわいなんて。馬鹿げている、と思う。
それでも、時々脅威のようなものを感じていることは否定できない。
聡(さと)い子といえば、そうなのだろうが、
祥子は七海がことばを覚え始めたときから、七海の敏感さに気付いていた。

次に会った時には、もう、七海はベッドから起きられない状態だった。
その顔には、はっきりと死相が表れていた。

それでも、ベッドのそばへ行くと、「しょーこちゃん、ありがとう。」と言って、微笑んだ。
苦しいはずなのに、七海が大人の対応をするので、祥子の方が辛い気持ちになった。
しかし、帰るときには、祥子はまた、どきっとさせられた。「しょーこちゃん、ごめんね。しょーこちゃん、ななみのこと、こわい。ななみのせいでかなしいね」と七海が言ったのだ。

「じゃあ、ななみちゃん、はやく元気になって、ママや祥子おばさんを喜ばせてね」
祥子はそう言ったが、笑顔を絶やさない努力をしていた自分の内心を見破られて、いつものことながら本当にこわかった。

だから、七海が死んでしまったと聞いたとき、悲しかったけれども、ほっとしたことも事実だった。七海も人の子だったのだ、と思った。

まさか七海が不死だなんて、思ってはいなかったが、それでも、何かを起こしてしまうのではないか、と思っていた。超能力とか、奇跡とか。そんな力が七海にあるんじゃないかと。それもいい、と思っていた。七海の病気が治れば、お姉ちゃんも喜ぶ。義兄だって。

5．スペシャルがいつもイイ意味とは限らない

姉から七海がいよいよ駄目かもしれないと聞かされても、
祥子は七海への考えを変えなかった。

七海は生き延びるかもしれない。
たとえ、お医者さんがもう駄目だと言っても。
あの子は、特別だわ。

根拠のない、淡い期待もむなしく、
七海は、病気と闘いながらも、病気に圧倒されて、死んでしまった。

痛みも感じず、安らかに逝っただろう、という医者の言葉だけが、
最後の救いだった。
しかし、これは一般的な解釈である。
姉の景子がそんなことでは救われないほど、衝撃を受けていることを、祥子は知っていた。祥子には子供はいないが、娘を失った母親の心は察するに易いものがある。義兄のいない昼間に、姉をサポートすることも、自分から買ってでた。人のいい義兄は「一緒に、景子を支えよう」と言ってくれた。

七海が亡くなってから、一ヶ月ほど経った頃。
現実の忙しさにまぎれていた祥子は、義兄から夢の話を聞かされて、
驚いた。

七海と対峙していたときの「こわさ」を思い出す。
景子の夢に毎夜、七海が現れるという。
これでは、まるで魂が彷徨っているようではないか。
いや、待てよ。景子のことを覚えていない七海ちゃん？
いつも、あんなに、「ママ、ママ」って言ってたのに？
祥子は夢分析には詳しくないので、夢の意味などよく分からない。
ただ、こわい。
七海ちゃん、あなた一体、何者だったの？
言いようのない不安が募る。

七海ちゃんが死んで二年と半年。
お姉ちゃんは、まだ七海ちゃんの夢を見てる。たぶんだけど。
もう、雅志さんにも話さないみたいだし。
ううん。絶対に見てる。

それに「本当はもう、すっかり元気なの」って、お姉ちゃん、全然大丈夫じゃない。
気付いてないのかな？
自分が青白い顔してるってこと。

6．そして、僕の景子は消えてしまった

景子とは職場で知り合った。
その後は、お決まりのコースをたどり、結婚。
新婚旅行はハワイへ行った。
外から見れば、平凡で月並みだったかもしれないが、幸せだった。

待望の子供が出来て、二人で喜んだ。
その子が不治の病だと知って、悲しかったが、
それでも精いっぱい、父親の務めを果たしてきたつもりだ。

しかし、その子は、永遠に私たちの元を去ってしまった。
幼稚園にも通ってなかった、娘の葬式は、家族だけの静かなものだった。

それから、2週間が過ぎた。
朝起きて、一階に降りていくと、景子が放心したまま、リビングのソファに座っていた。
あの頃は、毎日そんな感じだった。
「景子。おい、景子。」
声をかけても、景子は焦点の定まらない目をしている。
肩を揺すってやると、やっとこちらを振り向く。
「おはよう、景子。」
「もう朝なのね。」
「そうだよ。僕と一緒に朝ごはん、食べるだろう？」
「いらない。」
「わかった。じゃあ、オレンジジュースでも飲む？」
「うん。」

あの頃、景子を見ていると、時々不安になった。
目の前にちゃんと存在しているはずの景子が、どこかへ行ってしまいそうな気がして。
でも、それはこちらの勝手な杞憂であった。

ゆっくりとではあったが、景子は確実に良い方向へ進んでいった。
―抜け殻のようだった景子に、魂が戻ってきた。
魂なんて信じていないが、本当にそう思ったのだ。
―ああ、景子が帰ってきた。僕の景子が。

景子が段々、以前のように笑うようになったと、祥子ちゃんが僕に言ってきた。
その時、祥子ちゃんの笑顔を久しぶりに見たことに気がついた。
顔には出さないけれど、祥子ちゃんも相当、心配していたのだろう。
根っから陽気な子が、必死の形相ばかりしていたことに気付かず、彼女に頼ってばかりいたな、と少し申し訳なく思う。
こういう時、景子だけじゃなく、自分自身も、たくさんの人に支えられている事を実感する。

景子から声がかかる。
「二人とも、何をそこでしゃべってるの？ご飯が冷めちゃうわよ」
その声に、祥子ちゃんと顔を見合わせ、微笑を交わす。
「今、行くよ。」

そんな日常が日常として戻ってきたかのようなある日、
景子は、忽然と姿を消した。
財布も免許証もパスポートも、全て家にあった。
ただ、金魚だけが景子と一緒に消えていた。

警察は、当初、事件の可能性があるとしていたが、結局は家出と判断した。

景子は未だ、見つかっていない。

7．元気なんだ。元気なんだ！元気なんだ？

「二人とも、何をそこでしゃべってるの？ご飯が冷めちゃうわよ」
二人をテーブルに急かすと、祥子と雅志は私の顔を見て、目を見合わせて笑った。雅志が、まるで駄々っ子を宥めるように優しい口調で、「今行くよ」と返事する。
久しぶりに三人がそろった、和やかな夕食。

景子は食器を棚にしまいながら、昨日のことをぼんやり思い出していた。
食器洗い機には3人分の食器。
私と雅志と祥子。大人だけの夕食。
食後にはコーヒーを飲みながら、雅志が買ってきてくれた高級チョコを食べて。
まるで、雑誌にでも出てきそうな、優雅さだった。
それでも、景子にとってはどこか空虚で。

食器を片付け終わった景子はテレビをつけて、ソファに座り込む。
自然とため息がこぼれる。
実は、景子はこのところ、不安だった。

もうすっかり調子は戻っている。
だから、祥子と雅志に心配をかけまいと、顔には出さないようにしている。

でも、毎晩見ていた、あの七海の夢を最近見なくなった。
夢のせいで悲しくなることはなくなったけれど、
そわそわして、気が気でない。

人間、不思議なものだ。
苦痛だった夢、悪夢を今は見たいと願っている。

祥子も最近では週に1度くらいしか、訪ねてこない。
今みたいに、一人、居間でテレビを見ていると、
どうしても頭が七海の方へとスイッチしていく。

七海は元気だろうか？
寂しがってはいないだろうか？
次に会ったときも自分に優しく微笑んでくれるだろうか？

七海の金魚をぼうっと見る。
ちょっと元気がない。
塩水にでもいれれば元気になるだろうか……。

このままでは駄目だと分かっていても、ついつい陥ってしまう、魔のループ。
誰にでも経験のある悪循環を景子は断ち切れないでいた。

8．祥子

姉が日に日に元気になってくるのとは反対に、
祥子は日に日に憂鬱になっていった。

景子自身はまだ夢のことで悩んでいたのだから、
それは完全には真実ではなかった。
しかし、その時の祥子にはそれが真実としか思えなかった。

そう。
祥子も悩んでいたのだ。景子を励ます一方で。

祥子は姉の景子より先に結婚した。
相手は大学時代から付き合っていた人だった。
景子ら姉夫婦には話していなかったけれど、
祥子たちの夫婦仲は上手くいっていなかった。
単身赴任で別居生活になってから、４年になる。

別居しても、最初の頃はまめに連絡を取り合っていた。
週末には、彼がこちらへ帰ってきた。
祥子も何度か、彼のもとへ訪ねていった。
しかし、大学時代から、彼は移り気だった。

離れて生活し始めて1年。連絡が途絶えがちになった。

そして、ちょうど七海が亡くなって、しばらく経った頃だった。
電話がかかってきた。「しばらく、仕事が忙しくなりそうだから、

そっちへは帰れない。」
「じゃあ、こっちから行こうか」と言うと、
「いや、本当に忙しくて、来てくれても構ってあげられなさそうだから、いいよ。」
彼の返事は素早すぎて、不自然に感じられるほどだった。

祥子はなんだか嫌な気がした。
でも、そのときの祥子は他のことに構っていられないほど、
姉の景子のことで頭の中がいっぱいだった。

電話でも、祥子はその話をすぐに打ち切ってしまい、
姉の具合が良くない話を彼にしたのだった。

それ以来、彼は一度も家に戻ってきていない。
祥子たちの間がこんなにも冷え切っているなんて、
雅志も景子も知らないだろう。

祥子にとって、姉は両親より近い存在だった。
お互いにお互いのことを隅々まで知り尽くしていた、はずだった。

お姉ちゃんは、掃除が苦手で時間にルーズ。
どうしようもない所もたくさんあった。

それでも、お姉ちゃんは一番、私に近い人だった。
小さい頃はつかみ合いの喧嘩をした。
いつも隣でご飯を食べて、テレビを見て、勉強をした。
夜には、枕を並べて眠った。
中学・高校くらいになると、よく二人で出かけた。
映画を観にいったり、ショッピングをしたり、カラオケへ行ったり。
友だちとするようなことを、よく姉と二人でやった。

2人でいると、いつもリードしてくれるのは姉だった。
祥子は、姉のことを愛していた。

一旦、大勢の中に混じると、社交的なのは妹の祥子の方だった。
景子は人見知りが激しく、奥手で、女とも男とも仲良くなるのに時間がかかった。
自然、景子には友だちが少なかった。
しかし、景子の友だちは祥子にまで親切にしてくれるような、人間のよくできた人が多かった。姉のおっとりした所がそうさせるのか、元来の人の良さからなのか。景子には人を優しい気持ちにさせるような所があった。

そんな姉の結婚相手を見た時、祥子は「やっぱり、お姉ちゃんだ」と思ったのだった。
祥子の不躾な視線にも構わず、
雅志さんは「初めまして。林雅志(はやしまさし)です。」
と言って、手を差し伸べてきた。
雅志さんの目はちょっと垂れ目で、その瞳は優しげだった。
実際に、雅志さんは初対面の祥子に、とても柔らかく微笑んでいた。
女性でこういう顔をする人はよくいるけれど、
男性で初対面からこういう顔を出来る人は案外少ないと思う。
祥子は、雅志さんはすごくもてそうだと思った。

ねえ、お姉ちゃん。
お姉ちゃんが結婚したとき、私が何を考えていたか、わかる？
羨ましかったんだよ、こんないい旦那さんを射止めて。
彼も私も、大学のときと変わらず遊び人で、安定とは程遠い日々だったから、

これからお姉ちゃんは、私たちが育ったような優しい家庭を築くんだと思うと、
辛いくらいだったんだよ。

景子がテレビに向って、ため息をついているとき、
祥子もまた、ファッション誌をうつろな目で眺め、過去を振り返っていたのだ。

9．TRUTH

そうか！金魚だ！あの子は金魚なんだ。金魚の七海が私に夢を見せている！！

ある日、ぼんやりと金魚を見ていた景子は、突然ひらめいた。
七海はこの金魚になったのだと。

弱っていることに気づいて1週間。
塩水につけた後、少しは元気になったが、
それでも、まだ動きが鈍い。
弱っているから、夢に出てこれないんだね。

そんなことを景子は自然と考え、納得していた。
なぜだか、すっきりとした気さえする。
そうか。私のせいではなかったんだ。
七海の夢を見ないのは、この金魚が弱ってるからだ。

でも、どうして七海は私にあんな夢を見せるのだろう？
どうせなら、もっとハッピーエンドな夢を見たい。
七海もそうでしょ？
だったら、なぜ？

必死に答えを考えていると、耳に電話の音が聞こえてきた。
「もしもし」

「あ、僕。今日帰りが遅くなるから、先にご飯食べてて。」
「わかりました」
「今日、祥子ちゃんが来る日でもないのに、ごめんな。どうしても片付けたい仕事があって。何かあったら、すぐに連絡して。会社の方でも、携帯でもいいから。」
「はいはい。じゃあね。」
雅志からだった。

雅志が夜遅くに帰宅するなんて珍しいから、
一人で夕飯を食べるのも、なんだか慣れない。
味気ないものだな、一人で食べるのって。
お昼も一人で食べたくせに、そんなことを考えてしまう。

・　・・・・帰ってくるのを待っていようと思ったが、
雅志はなかなか帰ってこない。

自然と金魚の方へ目がいく。
七海はどうしたいのかな？
七海は意思をはっきりと伝えられる子だった。
金魚のことも。金魚、飼いたいって、七海が言い出したのよね。
ああ、七海。
あなたを愛してる。ママはいつも変わらず、あなたのことを思ってる。

時計が規則正しく、時を刻んでいく。
元気のない金魚を見て、私ははっとした。

そうだ。七海が私のところへ来られないのなら。
私が七海に近づく努力をすればいいのだと。
金魚鉢を抱きしめるようにして抱える。
思ったより重くて、ちょっとよろけてしまう。
二階へ行こうね、七海。
今日は一緒に寝よう。

金魚鉢を二階の寝室のサイドテーブルへと移動させる。

ガタン
「ただいま」
雅志が帰ってきた。
「おかえり」
私の声が二階からしたのが分かったのか、まっすぐ二階へ上がってくる。
「あぁ～、疲れた。」
ネクタイを緩めながら近づいてきた雅志は、すぐに金魚鉢に気づく。
「なんだ。二階へあげたのか。」
「ええ。寝る前に見たら落ち着く気がして。」
「そうか。」
「ご飯、食べるでしょ。」
「うん。」
「じゃあ、温めてあげる。」
「じゃあ、先に風呂入ってくる。」
息ぴったりの会話に、私たちは微笑んだ。

この夜が私たちの最後だなんて、誰が思うだろう？
私たちさえ、気づかなかったのに。
新たな始まりさえ感じさせるあの夜に、
私は終焉への架け橋の淵に一人、立っていた。

9．TRUTH（後書き）

ここまで、拙い文章を読んでくださってありがとうございます。お話はもう少し続きます。感想やダメ出しなど頂けると、大変嬉しいです。

１０．お姉ちゃんとの思い出

お姉ちゃんと、一緒に過ごした日はたくさんあるのに、
私はなぜだか、あの一日のことが忘れられない。
その日、久しぶりにお姉ちゃんの手料理を3人で食べた。
もう結婚している妹が姉夫婦と夕飯を食べるなんて、
アツアツの二人に水を差すようで悪いと言うと、
「なに馬鹿なこと言ってんのよ」とお姉ちゃんに笑われた。

景子姉ちゃんはその頃、段々と以前のように笑うようになっていた。
雅志さんにそれを言うとき、自然と顔が綻(ほころ)んでしまったのを覚えている。
それに応えるように、雅志さんもすっごく嬉しそうな顔をして、
「祥子ちゃんも大変だったね。今まで言いそびれてたけれど、ありがとう。」
と言ってくれたのだ。なんだか、学校の成績を褒められた子供みたいな気分だったが、不思議と悪い気はしなかった。さすがお姉ちゃんの旦那さんだと思った。

そこで、お姉ちゃんから声がかかる。
「二人とも、何をそこでしゃべってるの？ご飯が冷めちゃうわよ」
その声に雅志さんと顔を見合わせ、微笑を交わす。
「今、行くよ。」雅志さんが答える。

絵に描いたような姉夫婦の姿に、
ちょっとだけ、私はうっとりとして、夕食の席についたのだった。

「今度、４人で出かけようか。」
「それ、いいわね。
祥子と晃彦さんには随分、迷惑をかけたし。
ねえ、今度はいつ、晃彦さん帰ってらっしゃるの。」

いつの間にか、話が４人で出かける方向になっていた。
私は微笑みながら、気づけば答えてた。
「今、新規の仕事がたてこんでて、忙しいみたい。
いつ帰ってくるか、ちょっと分からないわ。」
二人は、私たちが完全な別居生活であることを知らなかった。

「さすがエリート。うちの人にも見習ってほしいわ。」
お姉ちゃんが横目で雅志さんを見やる。
「これでも頑張ってるんですけど??」
いいだろ?忙しいより、暇なほうが。」
お姉ちゃんの言葉に雅志さんはちょっと不満そうだ。

二人のふざけあいに、私は吹きだしてしまう。
お姉ちゃんも雅志さんも、ものすごいロマンチストだ。
だから、二人の会話はいつも、ちょっと誇張が入っている。
「幸せな夫婦ごっこ」をわざと滑稽に演じながら、
本当に幸せな夫婦をしている。

私はそれが、昔から羨ましかった。
こんなに優しい旦那さんを見つけてきた姉が妬ましかった。
七海ちゃんが生まれて、本当に二人は幸せそうで。
幸せが遠い自分が悲しくて、お姉ちゃんの顔なんか見たくないと思ったときもあった。

しかし、幸せな家庭を築く姉が誇らしかったことも事実だった。
七海ちゃんを失っても、結局、この二人の絆は変らなかった。

４人で出かけようと言われた、あの時、
お姉ちゃんは私の気持ちに気づいていないと確信していた。
そして、そんなお姉ちゃんの鈍感さに、ときどき苛々していたのも事実。
こんなに、姉夫婦を羨んでいるなんて、絶対に気づいてないと思ってた。

その確信は今でも変わらない。お姉ちゃんは私の気持ちに気づいてなかった。

私たちが姉妹でどんなに似ていても、
どんなに一緒に育とうと、
所詮は他人。
相手の考えていることまでは分からない。

ねえ、お姉ちゃん。
あの頃、お姉ちゃんは何を考えていたの？
私にはわからないよ。
全然、わからない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7869e/

博物館に眠る金魚

2010年10月8日12時16分発行